

卵がうまれたつぎの年はなぜか大千ばつになり、卵が無事にかえらなかつたら、さらにひどい大千ばつがずっと続いていくというから、はた迷惑どころか、サグの人たちにとっても日々の生活に関わることになる。

ナユグには五つの卵がうみつけられるが、それらは最初からラルンガのエサになる運命で、残るひとつ、ニュンガ・ロ・チャガ〈精霊の守り人〉の体にもうみつけられた卵が問題になる。

さて、その卵が、新ヨゴ皇国の第二王子、チャグムの体にもうみつけられる。新ヨゴ皇国では、皇族は「神」なので、得体の知れない妖怪にとりつかれたチャグムの存在は不都合になる。王の刺客である〈狩人〉と、卵食いのラルンガの両方から命をねらわれる。それを女用心棒バルサが守るといのが『精霊の守り人』の筋立てになる。

冒頭にあげた引用部分は、卵がもうすぐうまれるので、ナユグのヨナ・ロ・ガイ〈水の民〉がチャグムのまわりをうれしそうに泳ぎまわっているところで、サグからはふだんは目に見えないナユグの水のしぶきがキラキラとすかしで見えるという幻想的な場面だ。

このあと、ラルンガ〈卵食い〉との最後の死闘をへて、チャグムは無事に卵をうむことに成功するのだが、「守り人」の物語は、ナユグとサグという二つの世界が二重写しになっているだけでなく、語られることば自体が幾重にも

重なりあっている。

先住民ヤクールの言い伝えでは、豊穣をもたらすニュンガ・ロ・イムの卵をだいている少年を、その卵をねらうラルンガから必死で守りぬこうとするものとして語られる。しかし、新ヨゴ皇国の正史では、二百年前に建国の祖トルガイが水妖を退治して《帝》となり国をおこしたと、支配する者にとって都合がいいことだけが語られる。ナユグとサグのことも、ふたつの魔物の存在も語られることはない。

星読博士シュガが読み解いた、初代聖導師ナナイによって書かれた〈古代ヨゴ文字〉の石板には、臆病者のトルガイに対するナナイの愚痴と、ナナイがヤクールたちとともに卵を守るために卵食いとたたかっていたことが書かれている。が、これは、正史を「光」だとすれば、国家の「闇」にある。日の目を見ることは永久にないだろう。

物語は、それらいくつものことばを重ね合わせながら、進んでいく。

第三巻『神の守り人〈来訪編〉』(2003.2)も、いくつもの物語とことばを重ねながら語られていく。舞台はロタ王国。『精霊の守り人』で、サグとユナグという形で出てきたこの世とあの世が、ロタでは〈ノユーク〉という名で語りつがれている。この呼び名は『闇の守り人』(1999.2)に出てきた〈ノユーク〉と同じだ。『虚空の旅人』(2001.8)のサンガル王国では〈ナユークル〉という名で出てくる。